

ゆへ、直に幸左衛門が門に入り、其術を學べり、これによりて日々彼客屋へ通ひたり、一日右のバブル川原元伯といへる醫生の、舌疔を診ひて治療し、且刺絡の術を施せしを見たり、扱々手に入りたるものなりき、血の飛び出す程を預め考へ、之を受けるの器を、餘程に引はなし置たるに、飛透血てうど其内に入りたりき、是れ江戸にて、刺絡せし。の始なり、其頃、翁年若く、元氣は強し、滯留中は、怠慢なく、客館へ往來せしに、幸左衛門、一珍書を出し示せり、これは去年初て持渡りし、ヘーステル名人のシウルゼイン治外科術といふ書なりと、我深く懇望して、境樽二十挺を以て、交易したりと語れり、

〔蘭學事始上〕一又年は忘れたり、一春かの幸左衛門、阿蘭陀附添にて參府せし頃、豊前中津邸にて、昌庶公の御母君御座内にて、不慮に御脛を折傷し給ひし事あり、貴人の事なれば、大騒ぎにて、彼是醫師を御招きの處、幸ひに吉雄幸左衛門出府居合候事ゆへ、直に御招きありて、御療治被仰付、御順快ありたり、此時前野良澤御手醫師の事ゆへ、懸合仰付られ、格別懇意となりたり、これ等蘭學の世に開くべき一といふべし、

〔皇國名醫傳後編下〕華岡隨賢子良平

華岡震、字伯行、通稱隨賢號青洲、紀伊人、世業醫、震學于吉益氏、又從大和見水受外治、歷遊諸州、研磨其術、既歸、搦内外合一活物窮理之說曰、方無古今、内外一理、泥古不可以通于今、略內不可以治於外、蘭醫密於理、而蘧于法、漢醫精于法、而拘於跡、故我術考治於活物、出法於窮理、方劑不必局束於成規、而藥餌所不及、鍼灸治之、鍼灸所不及、腹背可刳腸胃、可瀉、苟可以活人者、宜無不爲焉、於是用其意、製麻沸之方、號曰通仙散、值廢痼者、輒令先服之、昏醉然後下手、乳巖骨疽、痔漏、癩癧、癭瘤之類、衆不敢治者、皆割剝洗瀉、立刮去穢毒、從以膏湯、功績奇偉、稱爲華佗復出、

〔隨意錄四〕宋葉夢得、玉潤襟書云、華陀固神醫也、然范曄陳壽記其治疾、皆言若發結於內、針藥所不